ティーチング・ステートメント

所属 保健医療学部理学療法学科
名前 春名 弘一
作成日 2024 年 2 月 26 日

【責任】

理学療法学科に所属し、専門科目である中枢神経系理学療法分野全般、動作分析学、義肢装具学、臨床実習を主に担当している。また、兼担として保健医療学部義肢装具学科の専門科目である理学療法・作業療法を担当し、大学院においては理学療法治療学特論を担当している。科目担当以外には、学部ゼミ、大学院（修士課程）指導教員を担当している。

また、2023 年度より、就職支援センター副センター長を仰せつかっており、主に低学年からのキャリア教育の設計を担当している。

【理念】

理学療法とは、運動機能の改善を目的に運動や物理的手段を用いて行われる治療法である。手術や薬物治療など他の治療との違いは、理学療法の対象者自身が能動的に取組まなければ成立しない治療法という点である。それゆえに、理学療法士は高いコミュニケーション能力を持ち、患者や家族、他の医療スタッフも巻き込みながら前向きな雰囲気を醸成し、患者のモチベーションにアプローチする技術が重要と考えている。

そのため、本学科での理学療法教育では、精力的に他者に働きかけ、周囲の協力・理解を得ながら物事を達成する経験と、前向きな雰囲気を作り、周りの力を引き出すことができるマインドを育むことが重要と考えている。

理学療法士は生活活動に関わる身体運動の専門家として、医療・福祉の中で必要不可欠な職業である。他方、日本の人口動態が大きく変化する背景からも、これからの理学療法士には、これまでの医療、福祉、介護分野の枠組みにおける医学的リハビリテーションの領域のみならず、学校教育、行政、産業など、さまざまな分野へ職域を広げることが重要になる。そのために、他の学問分野と連携しながら、社会問題に対して解決に向けて取組むことが出来る人材を育成したい。

【方針・方法】

上記の理念を達成するために、以下の教育活動の方針・方法を取り入れている

《方針１：良き臨床家になるうえでの、伸びしろのある人材を育成》

・学生のモチベーションを高める
　（方法１⇒）医療現場の臨場感を常に意識させる授業を展開する
　（方法２⇒）実際の患者モデル様を招いた授業を実施する
・理学療法士に必要なコミュニケーション能力と協働する力を養う
　（方法３⇒）臨床実習のロールプレイを授業に導入する
　（方法４⇒）イベント、学外での取り組みを自ら企画し、楽しむ仕掛けを行う
・理学療法士に必要なプロフェッショナリズムを育成する
　（方法５⇒）臨床家による授業参加の機会と作る
　（方法６⇒）自ら臨床現場に学生を連れていく
・理論的思考を養う（知識を使える知識にする）
　（方法７⇒）“覚える”のではなく“理解する”ための授業の工夫➡反転授業の導入

（方法８⇒）学生の理解度を頻繁に確認する
（方法９⇒）習熟度の低い学生に対する補習をしっかり行う（基礎が重要）

《方針２：他の学問分野と連携して、さまざまな問題に対して解決に向けて取組むことができる人材の育成》
・理論的思考を養う（知識を使える知識にする）
（方法１⇒）“覚える”のではなく、“理解する”ための授業の工夫
（方法２⇒）学生の理解度を頻繁に確認する
（方法３⇒）習熟度の低い学生に対する補習をしっかり行う（基礎が重要）
（方法４⇒）社会で活躍する一流の理学療法士に触れる機会を積極的に設ける
・他分野の方と協働できる力を養う
（方法１⇒）ゼミにおいて、学際分野の研究を積極的に勧める
（方法２⇒）多学科横断の合同ゼミ授業を実施する
（方法３⇒）自らの医工連携研究に参加させ、理学療法士以外の社会人と協働して取組む機会を作る

【成果・評価】
・2023 年度国家試験合格率 100%（見込み）
・卒業生が活躍している
・学生授業アンケートの満足度が高い
・学科教員による公開授業では高い評価を得ている
・臨床家（現場の理学療法士）の評価が高い（定量的なデータはない）

【目標】
《短期目標》
・国家試験合格率 100%
・就職率 100%
・ゼミ生 OBOG の学会発表が１演題/年ある

《長期目標》
・正課授業で地域問題に対して理学療法学を応用して解決に向けて取組む授業を展開
・臨床家（現場の理学療法士）の評価が北海道 No.1
・卒業生の大学院進学者増加（1 人/年）
・理学療法士として、医療・介護分野以外での就職者を輩出する